

パウロとガラテヤ人の 信頼構築の内実

—「ガラテヤの信徒への手紙」

3章1-5節、4章12-15節を中心に —

**An Inquiry into Paul's relationship with the Galatians:
In Light of Gal 3:1-5 and 4:12-15**

村山 盛葦

Moriyoshi Murayama

キーワード

十字架につけられたキリスト、聖霊、パウロの疾患、古代密儀宗教、邪視・凶眼、イエスの焼印

KEY WORDS

Crucified Christ, Holy Spirit, Paul's illness, ancient mysticism, evil eye, marks (*stigmata*) of Jesus

要旨

パウロとガラテヤ人との信頼関係は、おもに「十字架につけられたキリスト」の提示、聖霊受容（洗礼体験）、そしてパウロの疾患に対するガラテヤ人の対処を通して築かれた（ガラ3:1-5; 4:12-15）。本小論は、これらの出来事を古代の宗教的感性（密儀宗教、邪視信仰）や古代の人間論（ pneuma理解、視覚理解）の観点から考察する。この考察を通して本小論は、これらの体験が現代人が想像する以上に具体性と身体性がともなっていたことを明らかにする。すなわち、「十字架につけられたキリスト」の提示は、パウロの風貌と外見を実見する視覚的経験であり、聖霊受容は、「力動的実在」である聖霊が関与する、継続した身体的活動であった。そしてパウロの疾患は、ガラテヤ人に深刻な恐怖を与え、さげすみと唾棄に相当するものであったが、ガラテヤ人はパウロを「神の使い」、「キリスト・イエス」でもあるかのように受け入れた。このようなガラテヤ人がのちに論敵に説得され割礼を受けたことは、パウロに驚きと

ショック、そして怒りをもたらしたのであった。

SUMMARY

A good relationship between Paul and the Galatians was established mainly through Paul's display of the crucified Christ, the Galatians' reception of the Spirit (baptismal ritual), and the Galatians' response to Paul's illness (Gal 3:1-5; 4:12-15). This article investigates these issues in light of ancient religious ethos (in particular, mysticism and the evil eye) and ancient anthropology (in particular, *pneuma*-theory and sight). This investigation shows that these experiences were more corporeal and physical than modern people believe them to be. The crucified Christ was displayed in the scars and disfigurements left on Paul's body. The reception of the Spirit (a dynamic entity) involved ongoing corporeal activities in the initiate's body. Paul's illness caused the Galatians serious fear and might seem to deserve contempt and spitting; however, they welcomed him as an angel of God, as Christ Jesus. Such Galatians were later persuaded by Paul's opponents to be circumcised, which indeed evoked Paul's shock and anger.

はじめに

ガラ3:1-5と4:12-15において、パウロは過去に築かれたガラテヤ人との信頼関係に基づいて現在の問題に対処（論敵の論駁）している。その関係を支える核となる事実、「十字架につけられたキリスト」の提示、聖霊受容、パウロの疾患に対するガラテヤ人の対処の仕方であった。そしてガラテヤ人は「幸い」を味わっていた（ガラ4:15）。本小論は、古代の宗教的感性（密儀宗教、邪視信仰）や古代の人間論（プネウマ理解、視覚理解）の観点から、ガラテヤ宣教当時に成立したパウロとガラテヤ人との信頼関係を考察する。各主題の先行研究に依拠しながら、本小論は、パウロとガラテヤ人との信頼関係が現代人が想像する以上に具体性と身体性が伴った体験に根ざしていたことを明らかにする。

1. 3:1-5と4:12-15の関係について

最初に二つの当該箇所を簡単に見ておく。これらの箇所は、パウロとガラテヤ人との過去における個人的な関係を共通して扱っている。H. D. Betzによると¹、ガ

ラ3:1-4:31はパウロの福音の正当性を論証するセクションであり (*probatio*)、六つの議論 (3:1-5、3:6-14、3:15-18、3:26-4:11、4:12-20、4:21-31) と一つの補足説明 (3:19-25) からなる。3:1-5は正当性を論証する一つ目の議論で、論駁できない確固たる証拠が提示される。つまり、ガラテヤ人がパウロを通して福音を受容した体験である。4:12-20は、ガラテヤ人とパウロとの友情関係に基づいた議論を展開し、ガラテヤ宣教時においてパウロとガラテヤ人が築いた信頼関係を想起させている。つまり、ガラ3:1-5と4:12-15は同一時期についての同一主題を扱っている。また、ガラテヤ書を通して、パウロとガラテヤ人との過去における個人的な関係を論じているのはこれらの箇所のみである。無論、過去の信頼関係を想起させるだけでなく、その関係がそれ以降に生じた問題と関連づけられている。つまり、3:1-5では論敵がガラテヤ人を「惑わした」ことが言及され、4:12-20でも論敵の悪意とパウロの善意が論じられる。

2. 「十字架につけられたキリスト」の提示 (3:1)

ガラテヤ宣教時に「十字架につけられたキリスト」をガラテヤ人に公然と示した、とパウロは語る。通常、προγράφω (「前に描く、公然と掲示する」) を比喩的に解釈することで、「十字架につけられたキリスト」の提示を「十字架の言葉」(1コリ1:18-25; 2:1-2) などのパウロの宣教内容と捉える²。しかしパウロは、προγράφω に κατ' ὀφθαλμούς (「目の前に」) という句を付け加えて意味を強調しており、果たして宣教内容だけを意味しているのか疑問である。ガラテヤ宣教時、十字架の言葉が宣教されたことは当然であるが、「十字架につけられたキリスト」は、比喩表現ではなく字義の意味を伝えている可能性を以下に論じる。

古代の宗教において、教説を聞くだけでなく、神像や聖物など何らかの神聖な事物を実見することも入信の重要な契機となったと思われる。荘厳な神殿や聖所、数々の神像は如実にそれを物語っている。さらに宗教体験において、入信者はご神体というべきその宗教が奉じる神そのものやこの世に属さない超越的な何かを実見し、神秘的、霊的な諸力の働きを認識した³。この重要性は、密儀宗教において顕著であった。初期キリスト教が密儀宗教であったかどうか判断は容易ではないが、閉鎖的な集団形成 (主の晩餐)、個人の決断に基づく入信儀礼 (洗礼)、入信儀礼を通して神と深淵な関係に入ること (キリストとの共死共生)、そして個人的な救いの探求 (罪意識) など、双方に共通点を見出すことができる⁴。また、ガラ3:1は、入信前後の状況を記述している。それゆえ、密儀宗教の入信儀礼を考察することは、当該箇所の宗教的背景を知る上でも重要であると言える。

Marvin Meyer は、神聖な事物を示すことが密儀宗教の祭司の役割の一つであり、

秘儀のなかで最も重要な局面が「これらを注視すること (ἐποπτεύω)」であると論じている⁵。また、入信者は神聖な事物を目の当たりにするだけでなく、神の世界を観ること・「見神」に導かれる⁶。当時の秘儀信仰の様子を伝える資料として、アプレイウスの『黄金のロバ』(2世紀半ば)は貴重である。主人公ルキウスがイシス宗教の秘儀を経験するが、それによるとルキウスは秘儀の前に10日間の断食を行い、神殿内奥の聖室に祭司とともに入る。秘儀であるため詳細は説明されないが、ルキウスは次のように語る(『黄金のロバ』11巻23-24)。

私は黄泉の国に降りて行き、プロセルピナ⁷の神殿の入口をまたぎ、あらゆる要素⁸を通してこの世に還ってきました。真夜中に太陽が晃々と輝いているのを見ました。地界の神々にも天上の神々にも目のあたりに接して、そのお膝元に額ずいてきました⁹。

ルキウスはこの説明が難解であることを認めながらも、秘儀の内容を詳らかにすることで神罰がくだることを危惧し、それ以上説明は与えない¹⁰。その代わりに、秘儀を受けた翌朝の様子を伝える。それによると、ルキウスは太陽と女神像に似せて着飾られ聖室から神殿の真中に導かれる。すると突如四方の幕が取り払われ多くの参列者たちがなだれ込み、その後皆と共にお祝いの会食を持つのである。その翌日も同じ儀式と聖なる会食を祝い、一連の秘儀が完了する。

詳細は明らかでないが、秘儀を通して入信者は暗闇と死の世界にいったん入り、新しい命(再生)を経験すると推察できる。そのなかで神々と直に出会い神々を礼拝する。また、ルキウスが着せられた衣装が象徴するように、秘儀を経験した者は神々に同化すると信じられていた。この描写は、下記で考察するように、パウロが論じる洗礼の出来事(ロマ6:3-11)を理解する上でも示唆に富む。ただ、目下の議論にとって重要なことは、秘儀において具体的に神もしくは神聖なものと出会う(見る)という点である。

当該箇所「十字架につけられたキリスト」を字義的に解釈するならば、キリスト信仰者は、洗礼や霊体験を通して「十字架につけられたキリスト」と遭遇する神秘体験をもったと推察することができる。ただし、パウロが προγράφω と κατ' ὀφθαλμούς の用語を通して、それが公然と示されたことを強調している。そのため、ここで述べられている出来事が個人的な神秘体験に限定することはできない。では、「十字架につけられたキリスト」が映像的に人々の前に提示されたのだろうか。しかし下記で言及するように、図像としての「十字架のキリスト」が当時存在した可能性は低い。

この問題に対して、Basil S. Davis の考察は示唆に富む。Davis は「目の前に示され

た、十字架にかかったキリスト」とは、パウロの中に (ἐν ἐμοί) 顕現したキリストであり (ガラ1:16)、今なおパウロの中に (ἐν ἐμοί) 生きているキリストである (2:19-20)、と論じる¹¹。具体的には、それはパウロが受けた迫害の経験とその傷跡である、と。事実、十字架のキリストと迫害と苦難の中に生きる彼自身との不可分性を、パウロは宣教活動の根幹においている (1コリ2:2-3; 4:9-13; 2コリ4:10-11; 12:10; 13:4; ガラ5:11; 6:12, 14)¹²。また、パウロはガラテヤ書の最後で、「私の体に (ἐν τῷ σώματι μου)」ある「イエスの焼き印 (τὰ στίγματα τοῦ Ἰησοῦ)」(6:17) に言及している。「焼き印 (στίγμα)」を比喩的に理解することができるが、そもそも στίγμα は、στίζω (「刺す、刺青をする、焼印を捺す」という動詞に由来し、古代の奴隷が身に受けていたものであった。それゆえ、本来この用語は視覚的な意味合いを強く帯びている。このニュアンスをそのままに受け取るならば、「焼き印」は、パウロが受けた迫害の経験とその傷跡と考えることができるだろう。さらに、「焼き印」は複数形 στίγματα で表現されており、このことはパウロが宣教活動の中で繰り返し迫害を受け (2コリ11:23-27)、数々の傷跡や何らかの後遺症を示していることになる。

ガラテヤ宣教時、パウロは「弱く」、目に見えて不健康な状態であった (ガラ4:13-14)。A. J. Goddard と S. A. Cummins は¹³、ガラ4:12-15は、ガラテヤ宣教時にパウロが受けた迫害と苦難を示唆すると論じる。しかし下記に考察するように、彼の持病による身体的欠陥との関連を完全に排除することはできないであろう。いずれにせよ、以上の考察から、パウロは迫害と苦難の中に生きる彼の身体の中に、十字架のキリストが生きていると確信していたと言えるのではないだろうか。それゆえ、パウロ自身のありのままの姿 (外観)、すなわち、疾患や迫害による肉体的な傷跡や欠陥が、まさに「十字架にかかっているキリスト」¹⁴であると、ガラテヤ人に提示した可能性を指摘することができる。そして、この傷跡が「主イエスの奴隷」の印であると、パウロが理解したことは想像に難くない。

このように、ガラテヤ人はパウロの風貌や外見を通して「十字架につけられたキリスト」を視覚的に経験した可能性がある。その経験は抽象的ではなく、形や姿を備えた具象性を伴うものであった。ただし、このことは下記に考察するように、当時の邪視信仰を考慮に入れると、ガラテヤ人にとって試練となりうる状況でもあった。すぐあとに出てくる「あれほどのことを体験したのは、無駄だったのですか (τουσαῦτα ἐπάθετε εἰκῆ;)」(ガラ3:4) は、聖霊受容 (洗礼体験) だけでなく、このような、パウロの外見を実見したガラテヤ人の経験を含めて考える必要があるだろう¹⁵。

3. 聖霊受容 (3:2-5)

πνεῦμα という単語は「空気、風、氣息、精氣、精霊、魂」などと訳されるようにニュアンスは多岐にわたる。しかし古代人は共通して πνεῦμα が動力に関係する実在物と理解していた¹⁶。たとえば、哲学者や医学者は πνεῦμα が人間の体内外を自由に移動する物質と考えた (ディオン・クリュソストモス『弁論集』12.30、ガレノス『自然の機能について』3.197-198)。ストア哲学の理解によると¹⁷、πνεῦμα は宇宙全体に行き渡り、宇宙の統一的結合のために働きをなし¹⁸、宇宙のすべての個別的物体は、πνεῦμα との混合と緊張に応じて自己同一性と特性を得た。つまり、世界内に存在するものはすべて、πνεῦμα によって性質づけられ実体として存在したのである。

また医学者によると、πνεῦμα は吸気によって肺に入り、体内の管を通して心臓の左心室へと入り、次に脳に至った。そこから体内の異なる部位へ神経系を通して行き渡った (ガレノス『自然の機能について』3.209)¹⁹。πνεῦμα は、気管や血管を通路とし体内の情報や栄養を運ぶ役割を担い (ガレノス『自然の機能について』2.120-121; 3.197-198, 205, 214)、血液や体液と混和した²⁰。また、魂 (ψυχή) を持つ人間は、心臓内に生命原理としての「生氣的プネウマ (ζωτικὸν πνεῦμα)」、脳内には感覚などの心的活動に関係する「霊魂的プネウマ (ψυχικὸν πνεῦμα)」を配置していると考えられた (ガレノス『ヒポクラテスとプラトンの学説』1.185)²¹。また後1世紀、ストア哲学の影響を受けたアテナイオスは、「プネウマ医学派」を創設したが、彼は、万物の4つの構成要素 (στοιχεῖα)、すなわち、地・水・火・風／空気に5番目の構成要素として πνεῦμα を加えた²²。この医学派によると、πνεῦμα は人間の全身に行き渡るが、その πνεῦμα の流れが滞ることで病気が生じると考えられた²³。

A. A. ロングは古代人の πνεῦμα 概念を理解するために、近代の類比物として「ガス」を挙げている²⁴。ガスは空気中に漂っている気体であり、固体、液体とならんで物質の三態のひとつである。目には見えないが他の物質に作用を及ぼす。それゆえ、類比物としての「ガス」は、上述した πνεῦμα 理解を言い得て妙である。

このように、古代人にとって πνεῦμα は、現代人が理解するところの心理学的、超自然的、あるいは形而上学的な表現ではなく、物質的、身体的な実在物であった。つまり、πνεῦμα は、存在が触れられる「力動的実在」と認識されていたと言える²⁵。以上の考察は、後1世紀のヘレニズム世界に生き、πνεῦμα の用語を頻繁に使用したパウロの思想を理解する上で重要な文化的背景である。

πνεῦμα は真正パウロ書簡で約120回も使用され、そのほとんどが聖霊もしくは神の霊、キリストの霊を意味する²⁶。聖霊受容の機会、パウロの宣教 (1コリ2:4-5; 1テサ1:4-6)、洗礼 (1コリ6:11, 17; 10:2-4; 12:13; 2コリ1:21-22。参考、使1:5; 2:38; 19:2-6)、

賜物の受容（1コリ12:4-11）などがある。ガラ3:2-5では、3度 πνεύμα の単語が使用され霊体験が強調され、また、「福音を聞いて信じた」、「霊によって始めたのに」という記述から、洗礼を含む入信体験を想起させていると考えて良いだろう²⁷。この体験は、上述したように力動的実在である πνεύμα そのものを受け入れるという身体的体験であり、さらに洗礼はキリストと結合（共死共生）する神秘体験でもある（ロマ6:3-4, 8; コロ2:12-13; エフェ2:5-6）。

キリストとの結合は、ギリシアの密儀宗教（エレウシスの密儀、ディオニュソス宗教など）との関連が古くから指摘されている²⁸。各密儀によって強調点は異なるが、概してその儀式において、入信者は神聖なるもの（神）に属することで神の保護や安寧の約束を得、同時に、神の苦難と勝利を再現的に共有した²⁹。神に属するとは、宇宙及びそれを司る霊的諸力と入信者の間に、親密で特別な個人的な繋がりを実感することであった³⁰。キリスト信仰に入信するための洗礼においても、キリストの死と復活を共有し、キリストと一つとなる深い結びつきが生じたのである。そして、洗礼儀式の中心は βαπτίζεω という用語が示す通り、「水に浸す、沈める、沐浴する」という浸礼であった。それは「古き人、肉の人」の溺死、すなわち罪の洗いであった（1コリ6:9-11）。おそらく川や浴槽で裸の状態に浸水し（「着脱」のイメージ [ガラ3:26-27]）、水から上がることで「新しき人」「新しい命」を得た。それは終末の復活の先取りでもあった。また、賛美・喝采（「アッバ」 [ロマ8:15, 16; ガラ4:6]、「イエスは主なり」 [ロマ10:9; 1コリ12:3]）がともなっていると推察される³¹。このような身体的出来事が、キリストの結合という洗礼の秘儀にもなったのである。

さらに、神の πνεύμα を身体に受けるという聖霊受容は、その後の信仰生活にも影響を与えた。神の πνεύμα と人間の πνεύμα はそれぞれ独立した実体であるが、パウロは両者の混和を想定している。例えば、ロマ8:15-16でパウロは、「アッバ、父よ」と信仰者を叫ばせる神の πνεύμα の機能について言及し、αὐτὸ τὸ πνεῦμα συμμαρτυρεῖ τῷ πνεύματι ἡμῶν ὅτι ἐσμὲν τέκνα θεοῦ と説明する。ガラ4:6と違いここでは πνεύμα ἡμῶν（「わたしたちの霊」）が言及されている。この認識は人間の霊的な次元が「神の霊がその啓示的・贖罪的力を伝達する次元」³²になり得ること、そして人間の πνεύμα と神の πνεύμα とが何らかの形で交流、対話、同意することを示唆する。事実、パウロは神の πνεύμα が人間の心の奥底に関わり、執り成しの祈りを発することを承知している（ロマ8:26-27）。このような協働作業は、神が人間に神の πνεύμα を送ったことによって開始された。それはまさに入信の出来事であった（8:15。アオリスト時制 ἐλάβετε を使用）。そして、この過去の経験は今なお現在、有効であり、神の子であることを証しする（8:16。現在時制 ἐσμὲν を使用）。このように、神の πνεύμα と人間の πνεύμα が混和し、それが救いの経験であり続けていることが分かる。

1コリ6:17もまた、神の πνεῦμα と人間の πνεῦμα の混和を前提にしている。パウロは「主に結び付く者は主と一つの霊となるのです」と洗礼時の主との合一の経験を想起させている。その核となる出来事が「主と一つの πνεῦμα」であった。具体的な結合のプロセスは不明であるが、人間側の霊的なものと主の霊的なものが結合して、一つの πνεῦμα となると考えるのが自然であろう。つまり、人間の πνεῦμα が主の πνεῦμα と混和すると想定できる。結果として、二つの別々の πνεῦμα が共存するのではなく、一つの πνεῦμα があるのみである³³。このような理解は古代人、特に医学者のプネウマについての見識と符合する。また、上述したように、洗礼において入信者は神の πνεῦμα を受け、「アッバ」と叫びの応答をした³⁴。ロマ8:15-16が説明しているように、この叫びは神の πνεῦμα と人間の πνεῦμα の混和を示す重要な救いの出来事であり続けた。このように、双方の πνεῦμα が一つとなり、その混和を通して、キリストとの分断不可能な結合を信仰者は体験したのであった³⁵。このように、キリストの結合（共死共生）は、信仰者にとって継続した身体的体験となっていたのである。

こういうわけで、聖霊受容を体験した者は神と人の πνεῦμα の混和を経て、新しい身体的活動に臨んでいる。これが霊の導きの生活である（ガラ5:16-26）。パウロはこの事態を簡潔に「新しい創造 (καινή κτίσις)」と表現した（ガラ6:15; 2コリ5:17）。それゆえ、この状況に及んで、なお身体に割礼を施し救いの確証を得ようとすることは、「福音の真理」（ガラ2:14）に反する以外の何物でもなかった。

4. パウロの疾患（4:12-15）

この箇所にはガラテヤ宣教当時の様子が報告されている。13節に「知ってのとおり、この前わたしは、体が弱くなったことがきっかけで (δι' ἀσθένειαν τῆς σαρκός)、あなたがたに福音を告げ知らせました」とあるように、パウロが身体的弱さ（病気）のために旅程を変えてガラテヤ地方へ赴いたようである³⁶。もっともパウロの病気については種々の仮説が出されているが（マラリア、癲癇、頭痛など）³⁷、その一つに眼病がある。その根拠はガラ4:15の「自分の目をえぐり出しても (τοὺς ὀφθαλμοὺς ὑμῶν ἐξορύξαντες) わたしに与えようとしたのです」である。これに基づいてパウロの肉体的弱さが目に関係していると推察できるが、この句の解釈について研究者の見解は一致しておらず、大まかに三つに分けることができる³⁸。

①眼病への強い関心

まずは、可能な限り字義的に捉えて、パウロの眼病に対するガラテヤ人の強い関心と心配を表していると解釈することができる³⁹。パウロが肉体的疾患を持っていたこ

とは恐らく事実であり（2コリ12:7-8）⁴⁰、それが何らかの悪影響を目に与えていた可能性がある（視界の制限や弱視など）。宣教旅行中の諸々の苦難や迫害（1コリ2:3; 4:9-13; 2コリ1:8-10; 4:8-9; 6:4-5; 11:23-27; 12:10）がさらに健康状態を悪化させた可能性もある。パウロ自身認めているように、疾患のためか風貌も弱々しいものであった（2コリ10:1, 10）。このようなパウロの姿に対してガラテヤ人は、深い同情と関心を抱いた可能性がある。なお、ガラ6:11の「このとおり、わたしは今こんなに大きな字で、自分の手であなたがたに書いています」は結びの言葉の強調表現であるが⁴¹、手に負傷があったか、あるいは視力が弱いなど目に何らかの疾患があった可能性も指摘できる。また、のちに考察するように、ガラ4:14の「忌み嫌ったりせず（οὐδὲ ἐξεπτύσατε）」という表現が目や視線に関係する所作を含意していることもこの解釈を採る根拠となる。さらに、使徒言行録が伝えるパウロの回心物語によると（使9:1-19）、彼はかつて盲目を経験したことになる。このような伝承が初期キリスト教において作られた理由のひとつに、彼の眼病があったと言えるだろう。

②慣用的表現 その一「極端に走る」

二つ目と三つ目の解釈は、目は体の最も大切な部位であるため（申32:10; 詩17:8; ゼカ2:12）、それを捧げるということはそれ相当の覚悟と決断を意味すると考える。このことから、「自分の目をえぐり出す」は、他人の必要や幸せのために「極端に走る」という慣用表現として理解できる⁴²。ガラテヤ書の場合、パウロと彼の働きのために、ガラテヤ人が献身的に身を尽くしたことを比喩的に表現している、と解釈できる⁴³。具体的な働きは推測の域をでないが、ガラテヤ人は、雄弁と健康美に価値を見いだすヘレニズム文化の理想にとらわれず⁴⁴、病弱で弁舌がさえないパウロを支え、福音の真理を受け入れ、それに従って教会形成を献身的に手伝ったと推察できよう。

③慣用的表現 その二「真の友情」

三つ目は、「真の友情」を表現する当時の文学的言い回しであると解釈する。何らかの犠牲が伴うとき友情の真価が問われる。順境、平穏無事であるときは友情関係が維持されるが、逆境、危機に直面した時にその関係が試される。事実、「自分の目をえぐり出す」は、ルキアノスの『トクサリス—友情について』（40-41）（165年頃）に友情の真価を描写するところで用いられている⁴⁵。

この物語のなかでスキタイ人とギリシア人のそれぞれの友情関係が比較され、文化的に高度な知識をもっているギリシア人よりも、野蛮で未開人と言われるスキタイ人の方が篤い友情関係を築いていることが示される⁴⁶。具体的にはスキタイ人である、ダンダミスとアミゾケスの友情の篤さが語られる。彼らは「血潮の杯」⁴⁷を交わすほ

どの仲であったが、アミゾケスが敵陣に捕虜となり、ダンダミスが友人の釈放を求め敵軍の首領に会いに行った。交渉の結果、首領は釈放の条件（代価）として両目を求め、ダンダミスはすぐさま身をさし出し、彼の両目を「えぐり抜かせた（原語は ἐξορύσσω ではなく、ἐκκόπτω）」⁴⁸。首領は約束通りアミゾケスを解放したが、アミゾケスは自分のために盲目となったダンダミスの姿に耐えきれず、その後自ら目を潰し彼もまた盲目となった。盲目の二人はしかし、スキタイの国家の保護のもと栄誉を受けながら共に暮らすことができたのであった。彼らの行為は「美しい友情、真の友情」として語り継がれたと思われる。この文学的モチーフが、パウロの念頭にあったと推察することができる⁴⁹。

さらに興味深いことは、スキタイ人は黒海やカスピ海の北方に住んでいた勇敢な遊牧民族であり、旧約聖書の時代から北からの民族としてその野蛮さや凶暴さが恐れられていた（エレ4:6; 6:1）。そして、ギリシア・ローマ時代には「スキタイ／スクテヤ人」は「野蛮人」の同意語とされた（参考、コロ3:11）。ガラテヤ人はアジア州の内陸部に居住し、そこでは土着の宗教（大地母神キュベレ女神⁵⁰）が根強く信奉されていた。そのためヘレニズム文化の浸透も遅く、未開人（野蛮人）と評されていたところがある。この点はスキタイ人と共通すると言える。

さて、二つ目と三つ目の解釈は共に、パウロとガラテヤ人との間に篤い信頼関係が成立していたことを示す。無論、一つ目の解釈もまたガラテヤ人とパウロとの親密な関係を示すものであり、これら二つの解釈と矛盾するものではない。本小論では、「忌み嫌ったり（唾棄する）」、「試練ともなる」という、直前の14節で用いられているパウロの言説と当時の邪視信仰の観点から、「目をえぐり出す」は、友情関係や究極の決断を表わす文学的表現に留まらず、パウロの肉体的な疾患（眼病）に関係している可能性を指摘したい。

5. 邪視信仰

邪視信仰とは、悪意や妬みなど否定的な感情で相手を見つめることでその相手に災い・不運を及ぼす、という信仰のことである。要するに、気味の悪い目つきで睨まれると災難がふりかかると信じる迷信であるが、古今東西、あらゆる文化において邪視信仰は見出される。古代社会において、体から発散される物質の中で目からのものが最も威力をもっていたと考えられた。邪視・凶眼（βασκανία）は妬みや怒りの感情で対象を必要以上に見つめることで、その際目から何らかの物質（毒）が投射され、それが対象物に影響を与えると考えられた⁵¹。

プルタルコス（1世紀後半から2世紀初頭に活躍した文筆家）が「邪視」について記

述している。この説明は古代人の邪視理解を知る上でたいへん貴重であり、以下に『食卓歓談集』より抜粋して紹介する。

魔力のある目を持っている人があって、その目で睨まれると禍が降りかかる、と言われているが、ある宴の席で、、、たまたまそれに及んだ。皆がそんなばかなと言って笑っている中に、その宴の主催者のメストリウス・フロルスが、驚くべきことだが、この風評には事実の裏づけがあるのだと言った。(680C)

例えば、ただ見つめるだけで子供をひどく傷めつけてしまう人がいることを我々は知っている。子供は体質が脆くて弱いために、こういうものに感染して変調をきたしやすいからだろう。すでに体ががちりして固まった大人は影響を受けにくい。(680D-E)

匂いとか声とか息とかいうのはみな動物が発散するもので、それが感覚器官にぶつかって、感覚器官の方でもそれを受け入れると、感覚が動き出す、そういう要素だ、、、ことに呼吸には律動的な動きと動揺があり、それによって体がたえずたたかれて、発散作用がとくによく起こるのは目からの発散だということも当然じゃなかろうか。視覚はとくに敏捷だから、呼吸の、火のように輝かしい放射と一緒にあって、何か驚異的な力を放射する。(680F-681A)

また、あらゆる病気の中で目の病は、そばにいる人に一番、しかもたちまちうつる。目というものは病気をもらったりうつしたりする力がこれほどに強いわけだ。(681D)

デモクリトスは言っていますね、悪意をいだいている人から映像が発するが、それをその当人はまったく知らないわけでもなく、意図しないわけでもなく、またその映像には、送りだす人間の邪心と悪意がこもっている、そしてそういう邪悪をつめこまれた映像は、悪意をむけられた相手のもとにとどまり、ともに住んで、その人の心身を搔き乱し悪さをはたらく、と⁵²。(682F-683A)

このように古代人は、匂い、声、息と同様に目から何かが放出され、視線を送った対象に実際にそれが到達することで影響を及ぼす、と考えた。特に子供は体が柔らかいため、視線による影響を受けやすかった。これと同様の論理で、目の疾患は伝染性が高いと考えられ、眼病者は視線を投射する対象に実害を及ぼすと警戒された。上述

したように古代人にとって、*πνεῦμα* は身体の内外を自由に行き来する力動的実体であったが、前一世紀に活躍した天文学者・数学者ゲミヌスは、対象物と目との間で物質的なやり取りがあり、目から投射された *πνεῦμα* が役割を担っていたと考えた。また、ストア哲学は、*πνεῦμα* がその対象物の情報を *ψυχή* (心、精神) の主要な部分に伝達することで映像が生じたと考えた⁵³。このように、古代人は視線、特に眼病を患った者の視線を実体的に理解していたのであった。

このような視覚理解に基づいてパウロとガラテヤ人の状況を考察すると、ガラ4:14の「そして、わたしの身には、あなたがたにとって試練ともなるようなことがあったのに、さげすんだり、忌み嫌ったりせず (*καὶ τὸν πειρασμὸν ὑμῶν ἐν τῇ σαρκί μου οὐκ ἔξουθενήσατε οὐδὲ ἐξέπτύσατε*)⁵⁴」は、パウロの眼病が及ぼす災いをガラテヤ人が警戒したことを示唆すると言える。

邪視除け

さて、このような邪視からどのように身を守るのか、大きく3つの方法があった⁵⁵。

①お守り

邪視除けとして動物の骨や内臓組織が利用されたが⁵⁶、なかには「変な顔」をしたお守りがあった。変顔によって邪視を引きつけ、本来邪視を受けるはずであった対象からその視線を逸らせるのである (プルタルコス『食卓歓談集』682A)。磔刑のキリスト像やそのイメージは、その奇怪さゆえにこの種の変顔に匹敵する機能をもっていたかもしれない。

Susan Eastman は、十字架のキリストが邪視に対する厄除けとして機能した可能性を指摘している⁵⁷。Eastmanによると、ガラ3:7-14で展開している十字架の呪いの議論は、「十字架のキリスト」が邪視の呪いを吸い取る解毒剤として機能したことを示唆している、と。これは興味深い洞察であるが、パウロの時代に具体的な凶像としての「十字架のキリスト」が存在したとは想像しにくい⁵⁸。ただし、十字架のキリストにまつわるジェスチャーや言葉 (呪文) が何らかの邪視除けとして機能した可能性は否定できないだろう。事実、「キリストの名」の威力についてパウロを含め初期のキリスト信仰者は信じていた (1コリ5:4; 使3:6; 4:30; 19:11-20他)。さらに、「主の御手」によって魔術師エリマを退治するパウロが描写されている (使13:6-12)。なお、お守りの習慣はユダヤ教に古くから見られ⁵⁹、例えば「聖句箱 / テフィリン」 (*φυλακτήριον, תפילין*) (出13:16; 申6:8; マタイ23:5) が悪霊除けなどのお守りに起源があると、多くの研究者は推察している⁶⁰。

②唾を吐く（唾棄）

つばを吐くことは邪視など邪気を祓う手段であった⁶¹。プリニウス（後23/4-79年）によると、唾棄は呪いや災禍の運を払い除ける所作であった。

われわれは、てんかんの発作を起こしている人に唾を吐きかけて伝染を跳ね返す。同じようにしてわれわれは、右足が跛の人に会ったことにともなう魔力または不幸から身を守る。またわれわれは、自分のふところの中へ唾を吐いて、だいそれた望みをいただいたことを神々に詫びる。、、、見知らぬ人が到着したとか、眠っている嬰兒が見られたというような場合、保母にとって正しいやり方は、自分が預っている子に三度唾をはきかけることだ、、、。（プリニウス『博物誌』28.7.36, 39）⁶²

③同毒措置（毒を以って毒を制する）

サソリ、蛇、ライオン、犬、フクロウ、稲妻、雄ジカなどに囲まれた瞳を描いたものや図式化したもの⁶³、瞳が挿入された魔除けの首飾り、ファルス（男根）のレプリカの装着、手のジェスチャー（いずれも握りこぶしから中指立て、人差し指と小指立て、親指を人差し指と中指に入れる、など）が邪視除けに用いられた。この種のデザインや図式が記念碑や戸口、店、墓などに刻まれることもあった⁶⁴。

邪視所持者パウロ

ガラ4:14の「さげすんだり（ἐξουθενέω）、忌み嫌ったり（ἐκπτύω）」の「忌み嫌う」は「唾を吐く、唾棄する」の意である。すでに見たように、邪視除けや魔除けのために唾棄する所作はごく普通であった。このような邪視信仰とパウロの身体的な疾患（眼病）を考慮すると、ἐκπτύωは比喩的に「忌み嫌う」を意味するのではなく、この動詞の本来の意味である、「唾棄する、唾を吐く」と解釈すべきである。

上述したように、パウロの風貌は貧弱でヘレニズム文化の理想的イメージでもなかった。また、ガラテヤ宣教に赴いたとき、パウロは「イエスの焼き印（τὰ στίγματα τοῦ Ἰησοῦ）」を帯びまさに満身創痕の状態であった。さらに、『パウロ行伝（パウロとテクラの行伝）』2-3によると⁶⁵、パウロは背が低く、頭ははげ、足は曲がっていた。健康そうであったが、眉毛がつながり鼻はいくぶん曲がって鉤鼻であった⁶⁶。この興味深い記述は、邪視所有者特有の風貌を示しているとも考えることもできる⁶⁷。

上述したプリニウスの『博物誌』の説明によると、足が不自由な人や見知らぬ人は、魔力・不幸をもたらすと信じられていた。パウロが初めてガラテヤを訪れた際、ガラテヤ人にとってパウロは見知らぬ人であり、また、『パウロ行伝』の記述によれ

ば、パウロは足が悪かった。これらのことを考え合わせると、ガラテヤ人にとってパウロとの出会いは大きな試練となったことは頷ける。さらに、眼病を含め満身創痕はその状況をより深刻にしたと思われる。当時の文化的価値観に照らし合わせると、ガラテヤ人はパウロの風貌を見て、さげすみ、唾を吐きつけても何ら咎められることはなかったと言えるだろう⁶⁸。しかしガラテヤ人がとった行動はその逆で、パウロを「神の使い (ἄγγελος θεοῦ)」、「キリスト・イエス」であるかのように扱い(ガラ4:14)、そのなかで、彼らは「十字架につけられたキリスト」を視覚的に経験した。さらに「自分の目をえぐり出して」パウロに与えようとした。そして、彼らは「幸い (μακαρισμός)」を味わっていたのであった(ガラ4:15)⁶⁹。

6. まとめ

このように、パウロとガラテヤ人との信頼関係は、具体的な身体に関わる実体験を通して築かれた。しかし、割礼を強要する論敵によって、ガラテヤ人はいとも簡単にパウロの福音の真理から離れ、結果的に信頼関係を崩壊させてしまった。パウロのショックと怒りは大きかったと想像できる。ガラテヤ人は「あれほどのことを体験」したのに、なぜいとも簡単に論敵に説得されたのだろうか。その実情については、稿を改めて論ずることにしたい。

注

- 1 H. D. Betz, *Galatians* (Philadelphia: Fortress Press, 1979) 19-21.
- 2 Richard N. Longenecker, *Galatians* (Nashville: Thomas Nelson Publishers, 1990) 100-101; Douglas J. Moo, *Galatians* (Grand Rapids, Michigan: Baker Academic, 2013) 181-182.
- 3 Hans-Josef Klauck, *The Religious Context of Early Christianity: A Guide to Graeco-Roman Religions* (Minneapolis: Fortress Press, 2003) 9.
- 4 Marvin W. Meyer, ed., *The Ancient Mysteries: A Sourcebook: Sacred Texts of the Mystery Religions of the Ancient Mediterranean World* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1999) 4, 225-226.
- 5 Meyer, ed., *The Ancient Mysteries*, 5. ヘルムート・ケスターによると、聖物を見せる役目の祭司(ιεροφάντης)がエレウシスのデメテル聖所における最高位の祭司職であり、秘儀において「聖別された麦の穂」が入信者に示されたと推察している(『新しい新約聖書概説上—ヘレニズム時代の歴史・文化・宗教—』[新地書房、1989年] 235頁)。
- 6 オード・カーゼル(小柳義夫訳)『秘儀と秘義—古代の儀礼とキリスト教の典礼—』(みすず書房、1975年) 96-98頁、Meyer, ed., *The Ancient Mysteries*, 8.
- 7 ギリシアの下界の女神。コレと同一。
- 8 原語はラテン語 *elementa* でギリシア語では στοιχειά。宇宙を構成する本質的なもの(地、水、火、風)、自然界の諸要素、天体、諸霊(ガラ4:3, 9; コロ2:20)などを意味する。

- 9 邦訳はアブレイウス（呉茂一他訳）『黄金のロバ』下巻（岩波書店、1957年）を参照。
- 10 パウサニアス（後2世紀後半）は、イシスの聖所に潜り込んで秘儀の内容を口外した直後に死んだ男のエピソードを伝えている（パウサニアス『ギリシア案内記』10.32.18）。
- 11 Basil S. Davis, "The Meaning of ΠΡΟΕΓΡΆΦΗ in the Context of Galatians 3.1," *New Testament Studies* 45 (1999) 207-210.
- 12 参考、青野太潮『「十字架の神学」の成立』（ヨルダン社、1989年）8-61頁。
- 13 A. J. Goddard and S. A. Cummins, "Ill or Ill-Treated? Conflict and Persecution as the Context of Paul's Original Ministry in Galatia (Galatians 4.12-20)," *Journal for the Study of the New Testament* 52 (1993) 93-126.
- 14 現在完了形の分詞 ἐσταυρωμένος で表現され、キリストの十字架は過去のことでなく現在にも影響を及ぼしていることを示している。
- 15 πάσχω は「経験する」以外に「苦難を経験する」という意味も持っているため、「あれほどの体験」とは、ガラテヤ人が経験した迫害を意味していると推察することも可能である（Goddard and Cummins, "Ill or Ill-Treated?" 118-20）。しかしガラテヤ人が具体的にどのような迫害を受けたかは明らかでなく、また、文脈からガラテヤ人が迫害されたことを示唆するところもほとんどない。
- 16 E. Schweizer, "πνεῦμα" in *TDNT*, vol 6, 332-339.
- 17 A. A. ロング（金山弥平訳）『ヘレニズム哲学—ストア派、エピクロス派、懐疑派』（京都大学学術出版会、2003年）232-270頁。
- 18 パウロと同時代に生きたユダヤ人哲学者フィロンも πνεῦμα の力が大地に働いていることを認めている（フィロン『世界の創造』131）。
- 19 ガレノス（種山恭子訳）『自然の機能について』（京都大学学術出版会、1998年）105頁、脚注2。
- 20 二宮陸雄『ガレノス 自然生命力』（平河出版社、1998年）361-363頁。
- 21 ガレノス（内山勝利他訳）『ヒポクラテスとプラトンの学説1』（京都大学学術出版会、2005年）19頁、脚注3。
- 22 *The Oxford Classical Dictionary*, 3rd rev., ed. S. Hornblower et al. (Oxford: Oxford University Press, 2003) 203.
- 23 ガレノス『ヒポクラテスとプラトンの学説1』117頁、脚注3。
- 24 ロング『ヘレニズム哲学』237頁。
- 25 同上。
- 26 人間の霊を示す場合を除いて（ロマ1:9; 8:16; 1コリ2:11; 7:34; 16:18; 2コリ2:13; 7:1, 13; ガラ6:18; フィリ4:23; 1テサ5:23; フィレ25）、100回以上がこのケースである。
- 27 霊の洗礼は入信儀礼の主要素であり、信者に対してのちにキリスト者であることを想起させる役割をもっていた。それほど劇的、決定的な体験であった（James D. G. Dunn, *Baptism in the Holy Spirit: A Re-examination of the New Testament Teaching on the Gift of the Spirit in relation to Pentecostalism today* [London: SCM Press, 1970] 1-7）。
- 28 A. Schweitzer, *The Mysticism of Paul the Apostle* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1998 [original, second edition, Adam and Charles Black, 1953]) 1-25.
- 29 A. J. M. Wedderburn, *Baptism and Resurrection: Studies in Pauline Theology against Its Graeco-Roman Background*, reprinted edition (Eugene, Oregon: Wipf and Stock Publishers, 2011 [original, Mohr Siebeck, 1987]) 298-300.
- 30 A. D. Nock, *Conversion: The Old and the New in Religion from Alexander the Great to Augustine of Hippo*,

- reprinted edition (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1998 [original, Oxford University Press, 1933]) 115。
- 31 ウェイン・A・ミークス (加山久夫監訳) 『古代都市のキリスト教—パウロ伝道圏の社会学的研究』 (ヨルダン社、1989年) 391-394頁。
- 32 James D. G. Dunn, *Romans 1-8* (Dallas, Texas: Word Books, 1988) 454。
- 33 Dunn, *Baptism in the Holy Spirit*, 124。
- 34 無論、この叫びは洗礼時に限定されたものではなく礼拝中に神の子性を表現する際も発せられただろう (E. Käsemann, *Perspectives on Paul* [Philadelphia: Fortress Press, 1971] 130)。
- 35 G. D. Fee, *God's Empowering Presence* (Peabody, MA: Hendrickson, 1994) 24-26。
- 36 「さて、彼らはアジア州で御言葉を語ることを聖霊から禁じられたので、フリギア・ガラテヤ地方を通過して行った」(使16:6) がこの事情を反映しているかもしれない。一説によると、パウロは低地のパンフィリア州でマラリアに感染したため、療養するために高地にあるピシディア州のアンティオキア(約1,097m) に赴いたと考える研究者もいる (F. F. Bruce, *The Epistle to the Galatians: A Commentary on the Greek Text* [Exeter, UK: The Paternoster Press, 1982] 208)。高地ではマラリアの発症はまれであり、また高熱を緩和するために涼しい場所がよかったのかもしれない。
- 37 J. B. Lightfoot, *Saint Paul's Epistle to the Galatians* (London: MacMillan, 1921) 191; Longenecker, *Galatians*, 191。
- 38 Goddard and Cummins, "Ill or Ill-Treated?" 111。
- 39 James D. G. Dunn, *The Epistle to the Galatians* (London: A & C Black Limited, 1993) 236。
- 40 Lightfoot, *Galatians*, 189-190。
- 41 Betz, *Galatians*, 314。
- 42 Longenecker, *Galatians*, 193。
- 43 Cf. Bruce, *Galatians*, 210。
- 44 A. グウイン (小林雅夫訳) 『古典ヒューマニズムの形成—キケロからクインティリアヌスまでのローマ教育—』 (創文社、1974年) 34-44, 245-262頁、Robert S. Dutch, *The Educated Elite in 1 Corinthians: Education and Community Conflict in Graeco-Roman Context* (London: T & T Clark International, 2005) 95-211。
- 45 邦訳はルキアノス (呉茂一他訳) 『本当の話』ルキアノス短篇集 (筑摩書房、1989年) を参照。
- 46 ルキアノス 『本当の話』、訳者解説 (132頁)。
- 47 「血潮の杯」について、トクサリスは以下のように説明する。「ひとたび指を傷つけてその血を杯にしたたりこませ、剣の鋒先をそれにひたして二人がいっしょに捧げながらのんだからには、もうその時以降は一としてわれわれを引き離しうるのはなにもありません」(『本当の話』166頁)。
- 48 *Lucianus Scytharum Colloquia*, ed. E. Steindl (Leipzig: BSB B. G. Teubner Verlagsgesellschaft, 1970) 28。
- 49 Betz, *Galatians*, 228。無論、「目をえぐり抜く」という所作は文学的に設定されたもので、その信憑性に疑義を唱える研究者もいる (ルキアノス 『本当の話』、訳者解説、132頁)。
- 50 アナトリア全体に流布。フリギアのペッシヌースを中心地とする豊穡多産の女神。祭司による去勢礼や卑猥な武器を打ち鳴らし狂い踊るなど野蛮な宗教儀式をもっていた。キュベレ女神に仕える男神がアッティス。
- 51 E. T. エルワージ (奥西峻介訳) 『邪視』(リプロポート、1992年) 14-54頁。
- 52 邦訳は、プルタルコス (柳沼重剛訳) 『食卓歓談集』(岩波書店、1987年) を参照。
- 53 D. B. Martin, *The Corinthian Body* (New Haven: Yale University Press, 1995) 23。

- 54 岩波訳「そしてあなたがたは、私の肉体にあるあなたがた [にとって] の試みとなるものを、軽侮もせず、唾棄もせず」、NRSV, “though my condition put you to the test, you did not scorn or despise me”。
- 55 John H. Elliott, “Paul, Galatians, and the Evil Eye,” *Currents in Theology and Mission* 17 (1990) 265。
- 56 Davis, “The Meaning of ΠΡΟΕΓΡΆΦΗ,” 197-98。
- 57 Susan Eastman, “The Evil Eye and the Curse of the Law: Galatians 3.1 Revisited,” *Journal for the Study of the New Testament* 83 (2001) 72。
- 58 なお、「十字架 (σταυρός)」、「十字架につける (σταυρώω)」の縮約形であるスタウログラム (σ+ου) が2世紀末から3世紀初めのパピルス写本 (P⁴⁶、P⁶⁶、P⁷⁵) に見られる (David L. Balch, “The Suffering of Isis/Io and Paul’s Portrait of Christ Crucified (Gal. 3:1) : Frescoes in Pompeian and Roman Houses and in the Temple of Isis in Pompeii,” *Journal of Religion* 83 [2003] 53-55)。
- 59 E. R. Goodenough, *Jewish Symbols in the Greco-Roman Period*, volume two, *The Archeological Evidence from the Diaspora* (New York: Pantheon Books, 1953) 208-295。
- 60 *The Anchor Bible Dictionary*, vol. 5, ed. D. N. Freedman et al (New York: Doubleday, 1992) 370。
φυλακτήριον は「要塞、砦」の意味であるが、ユダヤ人によって「経札」を示す語として用いられた (J. H. Moulton and G. Milligan, *Vocabulary of the Greek Testament* [London: Hodder & Stoughton, 1930] 678)。参考、エルワージ『邪視』132-34頁。
- 61 エルワージ『邪視』386-412頁。
- 62 邦訳は、『プリニウスの博物誌』Ⅲ (中野定雄他訳) (雄山閣、1986年) を参照。
- 63 J. R. C. Cousland, “The Much Suffering Eye in Antioch’s *House of the Evil Eye*: Is it Mithraic?” *Religious Studies and Theology* 24 (2005) 61-74。
- 64 Elliott, “Paul, Galatians, and the Evil Eye,” 265。
- 65 小アジアで後200年頃執筆された (荒井献編『新約聖書外典』[講談社、1997年] 496頁)。
- 66 青野訳「小柄で頭がはげ、足はまがっていたが、しかし健康そうで、幾分しかめ面をし、鼻が高く、慈愛に満ちたパウロの姿を見つけ出した。」(荒井献編『新約聖書外典』235頁)。W. Schneemelcher 訳、“And he saw Paul coming, a man small of stature, with a bald head and crooked legs, in a good state of body, with eyebrows meeting and nose somewhat hooked, full of friendliness” (W. Schneemelcher, ed., *New Testament Apocrypha*, volume two, *Writings relating to the Apostles: Apocalypses and Related Subjects*, revised edition [Louisville, Kentucky: John Knox Press, 1989] 239)。
- 67 Elliott, “Paul, Galatians, and the Evil Eye,” 269。
- 68 Elliott は、パウロが邪視所持者として論敵から告発され、それに反論していると推察している (“Paul, Galatians, and the Evil Eye,” 262-73)。
- 69 この箇所以外にパウロはロマ4:6, 9でもこの用語を使っている。ロマ4:6, 9によると、「幸い」は神から義とされた者が味わうべきであり、アブラハムの信仰による義が雛形として言及されている。キリスト出現によって、キリストを信じるすべての者がアブラハムの子 (ガラ3:29) として義とされ、「幸福」を経験することが可能となったと理解できる。このことはガラテヤ人の「幸い」にも当てはめることができるだろう。

